

キリシタン版国字本における本語の開合表記

岸本 恵実

1. はじめに

16-17 世紀、キリシタンが編纂した書物では、当時日本語として存在しなかった教義に関する重要な概念は、訳語を作らずにポルトガル語やラテン語の原語のまま用いた。

日本語には、聖なる福音と共に齎される幾多の新しい事柄を言ひ表すべき語の幾つかが缺けてゐるので、或いは新しく作り出すか、一然しそれは日本では困難である—或いはわれわれの語から採って来て、それを日本語の発音と一層よく合致するやうに崩して、固有語と同じくするか、その何れかによる必要がある。さうして、葡萄牙語は多くの音節の上でも、日本語とうまく結びつくので、さういふ名詞は拉丁語からもいくらか採られたけれども、普通には葡語から採り得るのである。それらの名詞は、デウスや聖者に関するものか、道義に関するものか、その他日本語に欠けてゐる事柄に関するものかである。 (『日本大文典』f. 179 訳書 p.642)

本稿ではこれらの原語を、大塚 (1954) の「キリシタン版国語書中に用いられている外国語」という定義に倣って以下「本語」と呼ぶことにする。キリシタン版のうち日本の文字で書かれた国字本では、本語は仮名で表記されている。

キリシタンが編纂した書物の中で最も重要視されたのは、カトリックの基本的な教義を問答体で教える入門書『ドチリナ・キリシタン』であつただろう。このことは、厳しい迫害を経て現存数が少ないキリシタン書の中でも、『ドチリナ・キリシタン』は内容・刊行期の異なる刊本4種類 (1591年?刊前期国字本、1592年刊前期ローマ字本、1600年刊後期ローマ字本、1600年刊後期国字本)、写本1種類 (前期国字本の写本) が現存する事実からも推察されよう。この『ドチリナ・キリシタン』においても、前期版・後期版ともに、固有名詞を含めて100種類以上の本語が用いられている。

本稿では、前期国字本『どちりいなきりしたん』(1591年?刊・ヴァティカン図書館蔵) と後期国字本『どちりなきりしたん』(1600年刊・カサナテンセ文庫蔵) を中心に、⁽¹⁾ 本語表記の中でも、特に「ごらうりや」(Gloria)、「べるさうな」(Persona) などの語にみられるオ段長音の開合の問題を採り上げる。国字本どちりなの本語のオ段長音表記に開合のゆれがあることは、既に亀井・チースリク・小島 (1983:181-184) の指摘があるが、本稿では、この開合の別が原語であるポルトガル語の発音の違いに基づいたものであるという可能性について示唆したい。

2. 問題の所在

2. 1. ドチリナ刊本 4 種の日本語の開合

本題である本語の開合について考察する前に、ドチリナの刊本 4 種において、日本語の開合がどれほど正確に書き分けられているかを確認しておく。

キリシタンは日本語のオ段長音に開合の別を認め、ローマ字では開音を *o*、合音を *ô* で表記した。さらに、この開合の区別が日本語の発音上重要なものであることを心得ていた。

Caigô. (開合) Firaqi auasuru. i. Cuchino subari, Firogari. (開き合はする、又は、口の窄り、広がり) *O pronunçiar abrindo a boca, ou fechando a.* <口を開いて、又は閉じて発音すること> ¶ Cuchino caigô ga yoi. (口の開合が良い) *Ter boa pronunçiação.*

<発音が良い>

(『日葡辞書』)

日本語の立派な発音は、前述したアクセントの外には、殆どこれら四つの語(筆者注 開、合、清、濁の四つ)就中初の二つの語が示すことを上手に使ふことに係つてゐる。

(『日本大文典』 f. 175v 訳書 p. 629)

またロドリゲスは、開音‘ひろがる’(Firogaru) *o* と合音‘すばる’(Subaru) *ô* の発音について、次のように説明している。

‘ひろがる’(FIROGARV) に就いて

○ ‘ひろがる’(Firogaru) *o* は恰も *oo* と二字で書いてあるかのやうに発音するのであって、*Xô* は *Xoo*, *Tô* は *Too* のやうに発音する。或いは又、葡萄牙語で *Minha auô* (私の祖母)、*capa de dô* (喪服)、*enxô* (手斧)、*ilhó* (孔)、*filhó* (揚物のパン菓子)、*Nó da taboa* (板の節)、*muyto pó* (大変な塵)、その他このやうな語をば口を開いて発音する場合と同じである。

‘すばる’(SVBARV) に就いて

○ ‘すばる’(Subaru) *ô* は大体に *ou* と書いてあるかのやうに発音するのであって、*Xô* は *Xou*, *Tô* は *Tou* のやうに発音する。又、葡萄牙語で唇を円く近寄せ口を少しく閉ぢて *Meu auô* (私の祖母) を発音するのと同じである。

(『日本大文典』 f. 175v 訳書 pp.629-630⁽²⁾)

その一方で、ロドリゲスは地域によってこの開合の区別が混乱していたことも指摘している。

‘都’(Miyaco)及び少数の国々、即ち‘五畿内’(Goquinai)とその周辺の‘越前’(Yechijen)、“若狭”(Vacasa)その他少数の国々を除いて、日本の大部分の国々においては、‘開合清濁’(Caigo xeidacu)、即ちアクセントや発音がよろしくなくて、すべてそれぞれの国で勝手に‘訛つて’(Namatte)正しくない発音をしてゐるといふことである。

(『日本大文典』 f. 169 訳書 p. 607)

このように開合が一部で混乱していたと伝えられる当時、キリシタン版『ドチリナ・キリシタン』4種における開合の混乱例はごく少ない。

<表1>

	歴史的仮名遣	前期	前期	後期	後期
	日葡辞書見出し	ローマ字本	国字本	ローマ字本	国字本
世法	せほふ Xefō	(ナシ)	(ナシ)	xefō	<u>せほう</u> 8v-2, 8v-5
肝要	かんえう Canyō	<u>canyō</u> 35-11, 78-14	肝要	(ナシ)	(ナシ)
思ふ	おもふ Vomō	<u>vomō</u> 38-9	おもふ	(vomouaba)	(おもはゞ)
公会	けうくわい Qeōquai	<u>qiōquai</u> 38-21	けうくはい	(ナシ)	(ナシ)
中庸	ちゆうよう Chūyō	(ナシ)	(ナシ)	<u>chōyō</u> 44-26	ちうよう
寸法	すんばふ Sunpō	sunpō	すんほう	sumpō	<u>すんほう</u> 45v-6
混乱の用例数		4	0	1	3

※文字を囲っているのが混乱例である。

21-8 は 21 丁表 8 行目、8v-2 は 8 丁裏 2 行目を表す。

ローマ字本・国字本ともに、誤植の可能性があることは考慮に入れておかなければならないが、4種とも日本語の開合表記はおおむね正確である。特に本稿でとりあげる国字本2種についても、平仮名で書かれている開合の例は前期版で180例以上、後期版で550例以上あったが、ほとんど全てが正確に書き分けられていた。

2. 2. 国字本どちらなの本語の開合

『ドチリナ・キリシタン』刊本4種の日本語の開合を概観したところで、以下では、国字本2種類（以下、「前期版」「後期版」と略称する）における本語のオ段長音表記について詳しく見ていくことにする。

前期版・後期版を合わせて、オ段長音の表記が見られるのは以下の18語の原語である。長音で表記されているoは網掛けで示した。

※アルファベット順。綴りは主としてローマ字本による。「ラ」と注記したものはラテン語、「ポ」はポルトガル語、< >内は現代日本語訳である。

Apostolo (ポ) <使徒>, Catholica (ラ・ポ) <普遍的な・カトリックの>,
 Confessor (ラ・ポ) <聴罪司祭>, Domina (ラ) <婦人への敬称>,
 Dones (ポ古) <賜物>, Gloria (ラ・ポ) <栄光>,
 Gregorio <グレゴリオ (人名)>, Ieronimo <ヒエロニムス (人名)>,
 Matrimonio (ポ) <婚姻>, Memoria (ポ) <記憶>, Nōmine (ラ) <名前>,
 Noster (ラ) <私たちの>, Oleo (ポ) <油>, Persona (ラ)⁽³⁾ <位格>,
 Purgatorio (ポ) <煉獄>, Roma <ローマ (地名)>,
 Sacerdote (ポ) <司祭>, Sobrenatural (ポ) <超自然の>

この 18 語の表記を、前期版・後期版を対照させる形で<表 2>に掲げる。

<表 2>

原 語	前期版の表記	→ 後期版の表記	用例数	オ段長音の改訂
Apostolo	あほうすところ	→ あぼすところ	4	ほう→ぼ
Catholica	かとうりか	→ (ナシ)	4	とう→たう
	かとうりか	→ かたうりか	2	
	(ナシ)	→ かたうりか	5	
Confessor	こんへさうる	→ (ナシ)	1	さう→そ
	こんへさうる	→ こんへそる	1	
Domina	だうみな	→ (ナシ)	1	
	たうみな	→ (ナシ)	1	
Dones	だうねす	= だうねす	2	
	だうねす	→ (ナシ)	1	
	どんゑす	→ (ナシ)	1	
	(ナシ)	→ だうねす	1	
Gloria	くらうりあ	→ (ナシ)	9	らふ→らう
	くらうりや	→ (ナシ)	3	
	くらうりあ	→ ごらうりや	2	
	くらふりあ	→ ごらうりや	1	
	(ナシ)	→ ごらうりや	4	
Gregorio	げれがうりよ	= げれがうりよ	1	
Ieronimo	ぜらうにも	= ぜらうにも	1	
Matrimonio	まちりまうによ	→ (ナシ)	1	まう→もう
	まちりもうによ	→ (ナシ)	1	
	まちりもうによ	= まちりもうによ	1	
	まちりまうによ	→ まちりもうによ	5	

	まぢりまうによ (ナシ)	→ →	まぢりもによ まぢりもうによ	1 2	まう→も
Memoria	めもうりや めもうりあ	→ →	(ナシ) めもりや	1 1	もう→も
Nomine	なうみね のうみね	= →	なうみね のみね	2 1	のう→の
Noster	なうすてる なうすてる のうすてる なふすてる	→ → → →	(ナシ) のすてる のすてる なうすてる	3 7 3 1	なう→の のう→の なふ→なう
Oleo	おゝれよ をゝれよ おれよ	→ → =	(ナシ) (ナシ) おれよ	2 1 1	
Persona	へるさうな へるさうな (ナシ)	→ → →	(ナシ) へるさうな へるさうな	2 5 8	
Purgatorio	ふるかたうりよ ふるがとうりよ ふるかたうりよ	→ → →	ふるがたうりよ ふるがたうりよ ふるがとりよ	1 3 1	とう→たう たう→と
Roma	らうま らうま (ナシ)	= → →	らうま (ナシ) らうま	1 1 1	
Sacerdote	させるだうて (ナシ)	= →	させるだうて させるだうて	4 1	
Sobrenatural	そうべれなつらる	→	(ナシ)	1	

※1語の中の順序は、(1)前期版のみにあるもの、(2)前期版と後期版の表記が同じもの、(3)前期版から後期版で表記の違いがあるもの、(4)後期版のみにあるもの、の順に並べた。

前期版から後期版へのオ段長音についての改訂例には、大きく分けて次の三つの傾向がみられる。

- (A) 長音を短音に改めたもの (例 あほうすとろ→あぼすとろ) …7語 19例
 - (B) 開音を合音に改めたもの (例 ふるがとうりよ→ふるがたうりよ) …2語 10例
 - (C) 「ふ」を「う」に改めたもの (例 なふすてる→なうすてる) …2語 2例
- このうち (A) の改訂の理由に関しては、亀井・チースリク・小島 (1983:181) に

日本人が外国語の長音になじみがたかっただめではなく、本語のそのローマ字つづりに即した、ある意味では“音韻論的な”翻字の途をえらんだものと解される。…(中略)…そして、イペロ・ロマンに、“フォーネーマ”としての長音が存在しないからには、こうなることも、おなじく容易に首肯しうるところであろう。

と述べられており、筆者もこれに同意したい。(C)については、才段長音を表記するときは「う」の仮名に統一するという方針が徹底されたものと考えられる。

そこで本稿は上の(A)～(C)のうち最も難しい問題と思われる(B)の開合に関する問題を採り上げる。<表3>は、<表2>から後期版で才段長音表記が見られる例12語を採り上げ、開合の種類を示したものである。

<表3>

原 語	前期版の表記	→ 後期版の表記	用例数	開合
Catholica	かとうりか	→ かたうりか	2	合→開
	(ナシ)	→ かたうりか	5	開
Dones	だうねす	= だうねす	2	開ノマ?
	(ナシ)	→ だうねす	1	開
Gloria	くらうりあ	→ ごらうりや	2	開ノマ?
	くらふりあ	→ ごらうりや	1	開ノマ?
	(ナシ)	→ ごらうりや	4	開
Gregorio	げれがうりよ	= げれがうりよ	1	開ノマ?
Jeronimo	ぜらうにも	= ぜらうにも	1	開ノマ?
Matrimonio	まちりもうによ	= まちりもうによ	1	合ノマ?
	まちりまうによ	→ まちりもうによ	5	開→合
	(ナシ)	→ まちりもうによ	2	合
Nomine	なうみね	= なうみね	2	開ノマ?
Noster	なふすてる	→ なうすてる	1	開ノマ?
Persona	へるさうな	→ べるさうな	5	開ノマ?
	(ナシ)	→ べるさうな	8	開
Purgatorio	ふるかたうりよ	→ ふるがたうりよ	1	開ノマ?
	ふるがとうりよ	→ ふるがたうりよ	3	合→開
Roma	らうま	= らうま	1	開ノマ?
	(ナシ)	→ らうま	1	開
Sacerdote	させるだうて	= させるだうて	4	開ノマ?
	(ナシ)	→ させるだうて	1	開

上の表から、前期版から後期版への改訂では *Matrimonio* 1 語を除いて、

- (i) 前期版で合音であったものは開音に改められている
- (ii) 前期版で開音であったものは開音のままになっている
- (iii) 後期版のみにある用例の長音は開音で表されている

の三つのことが確認される。つまり後期版において、オ段長音が表記されるときは、*Matrimonio* 以外は全て開音で表されているのである。

なぜこの *Matrimonio* だけが、合音表記に改められたのだろうか。この理由について亀井・チースリク・小島 (1983:182-183) は次のように述べている。

さんねんながら実例はこの一語 (筆者注 *Matrimonio* を指す) にとどまるけれども、とにかく“マ行”にかぎって“合”のかなをもって翻字をこのんでいるのには、やはりそれなりのわけ (理由なり原因) があってのことと思われる。いまは音価のことにまではたちいれないが、このように書きわけをなさしめたゆえんのもの、けだし伝統に固執する保守の規範が現実 (すなわち発音) の正解をいまだ儼として君臨していたその勢力であったものと考えたい。… (中略) …そのかみ漢字のその原音にいわゆる開合の別が唇音においてのみさだかならざりしは、先行子音の唇音から中心母音へのその“わたり”がこのばあいここに関渉してのことであったものとすれば、これにたいし、十六・七世紀の交のその日本語において“オ段の開合”がもはやその混乱を阻みえなくなってしまうたその段階におけるマ行音の“後期版”におけるとりあつかいは、それと非唇音の系列とを相補の関係に立つ形の一組へ全からしめたものと解されうる (「う」のかなの実体は、また別途とりあぐべきことさらに属する)。

ここで提出されているのは、中国音韻学の伝統的な開合観を手がかりに、オ段長音の先行子音が唇音であるものは合音、非唇音であるものは開音、という相補的なかたちで表記されたのではないかとする説である。

前期版においてオ段長音の先行子音が唇音の *Apostolo*, *Memoria* の 2 語は、〈表 2〉のとおり後期版ではいずれも長音表記をやめて「あぼすとろ」「めもりや」と短音表記のみになっているので、この説を肯定する根拠にも否定する根拠にもならない。しかしこの説で問題なのは、2. 1. で挙げた『日葡辞書』やロドリゲスの記述を見る限り、キリシタンがもっていた開合についての知識はもっぱら母音の発音方法に関するもので、先行子音については全く記述がないことである。後期版において *Matrimonio* だけが合音に改められたことも、先行子音でなく母音そのものの音価が関係している可能性はないだろうか。

3. 改訂の様相

ポルトガル語では、強勢のある母音は長めに発音される傾向があり、強勢のある *o* の発音には後舌半広母音 [ɔ] と後舌半狭母音 [o] の二種類がある。これは Willams (1962:36-39) にあるように、祖語である古典ラテン語（前3～後2世紀頃）の長短アクセントに由来する、俗ラテン語（2～6世紀、庶民が話していたラテン語）の強弱アクセントを引き継いだもので、古典ラテン語の長い *o* がポルトガル語の [ɔ] に、短い *o* が [o] になったというのが原則的な変化である。したがって、アクセントのある *o* の発音が [ɔ] であるか [o] であるかは単語によって異なることになる。池上 (1984:105-106) によると、ポルトガル語では 14 世紀中葉から 16 世紀中葉の時期に、アクセントのある母音についてもない母音についても、現代語と同じ八母音体系が確立したという。したがって [ɔ][o] の発音は、16-17 世紀当時から現代まで変わっていないものとみなされる。そこで、元になったラテン語からの語源的な発音と、現代語の発音をもとに、〈表 2〉で挙げた 18 語の当時の発音を推定したい。

但し、この 18 語には、ポルトガル語のほかにラテン語 4 語と固有名詞 3 語が含まれている。ラテン語と固有名詞については、どの程度ポルトガル語風に発音されていたか、すなわち *o* に関していえば、[ɔ] と [o] の区別があったかどうか、あったとしてもその区別が明確でかつ固定しているものであったかどうか明らかではないので、今回は考察から外すことにする。

〈表 4〉は、〈表 2〉からラテン語と固有名詞を外し、オ段長音の開合に関する例だけを抜き出し、ポルトガル語の *o* の推定音の⁽⁴⁾種類を記したものである。ラテン語の下線を付した文字はそれが長母音であることを表す。

<表4>

原語	元のラテン語	oの推定音	前期版	→ 後期版	用例数
Apostolo	Apostolus	[ɔ]	開音	→ 短音	4
Catholica	Catholicus	[ɔ]	合音	→ (ナシ)	4
			合音	→ 開音	2
			(ナシ)	→ 開音	5
Confessor	Confessor	[o]	開音	→ (ナシ)	1
			開音	→ 短音	1
Dones	Donum	[ɔ]	開音	= 開音	2
			開音	→ (ナシ)	1
			(ナシ)	→ 開音	1
Gloria	Gloria	[ɔ]	開音	→ (ナシ)	1 2
			開音	→ 開音	3
			(ナシ)	→ 開音	4
Matrimonio	Matrimonium	[o]	開音	→ (ナシ)	1
			合音	→ (ナシ)	1
			合音	= 合音	1
			開音	→ 合音	5
			開音	→ 短音	1
			(ナシ)	→ 合音	2
Memoria	Memoria	[ɔ]	合音	→ (ナシ)	1
			合音	→ 短音	1
Oleo	Oleum	[ɔ]	合音	→ (ナシ)	3
Purgatorio	Purgatorium	[ɔ]	開音	→ 開音	1
			合音	→ 開音	3
			開音	→ 短音	1
Sacerdote	Sacerdos	[ɔ]	開音	= 開音	4
			(ナシ)	→ 開音	1
Sobrenatural	Super-naturalis	[o]	合音	→ (ナシ)	1

<表4>から、特に後期版において、口の開きの広い[ɔ]を開音で、狭い[o][ɔ]を合音で表記する傾向があることがわかる。それを数値的に表したのが<表5>である。

<表 5 >

発音	用例の分類	前期版	後期版
[ɔ]	[ɔ]を開音で表記した例 (その版で[ɔ]を長音表記した例の中での割合)	2 5 (64.1%)	2 3 (100.0%)
	[ɔ]を合音で表記した例 (その版で[ɔ]を長音表記した例の中での割合)	1 4 (35.9%)	0 (0.0%)
[o]	[o]を開音で表記した例 (その版で[o]を長音表記した例の中での割合)	9 (75.0%)	0 (0.0%)
	[o]を合音で表記した例 (その版で[o]を長音表記した例の中での割合)	3 (25.0%)	8 (100.0%)
[ɔ]	[ɔ]を開音で表記した例 (その版で[ɔ]を長音表記した例の中での割合)	3 (100.0%)	3 (100.0%)
	[ɔ]を合音で表記した例 (その版で[ɔ]を長音表記した例の中での割合)	0 (0.0%)	0 (0.0%)
合計 (長音表記の数)		5 4	3 4

※ %は小数点第二位を四捨五入した。

前期版では、本語の開合表記の区別が原語の発音に対応していることを確認することができないが、後期版への改訂に当たり、長音表記から短音表記に改めることと同時に、[ɔ]を開音で、[o]を合音で表記するという基本方針が確立されたように見える。それがもっとも顕著に表れているのが、*Matrimonio* の [ɔ]に対して、短音表記 1 例を除く 14 例全てが合音に改められたことではないだろうか。

ポルトガル語を日本の文字で表記するとき、[ɔ]を開音で、[o]を合音で表す後期版どちらの傾向は、ロドリゲスが『日本大文典』で日本語の‘ひろがる’ (*Firogaru*) の発音をポルトガル語の *auð*, *dø*, *enxø*, *ilhó*, *filhó*, *Nó*, *pó*などに含まれる [p] の発音に、また‘すばる’ (*Subaru*) の *avó* の [o] の発音と対応させていることと、ちょうど逆の対応関係になっている。つまり、後期版どちらにもみる本語の表記とロドリゲスの記述に限って言えば、日本語の開音とポルトガル語の [ɔ]、合音と [o] とは、音の長さは別として、母音の種類としてはちょうど対応しているといえることができる。

ラテン語 4 語と固有名詞 3 語については、前期版・後期版ともに長音で表記されている例は全て開音になっている。当時これらの発音が [ɔ] であったか [o] であったか明らかではないため、全て開音で表記された理由も不明である。可能性としては、これらの語も全て [ɔ] と発音されていたので開音で表記した、ラテン語と固有名詞についてはポルトガル語ほど [ɔ][o] の区別が明確でないので一律に開音表記に統一した、などの理由が考えられよう。

以上のことから、後期版どちらなでは、本語の開合は、ポルトガル語の[o]の場合は合音で表記し、その他は開音で表記していることがほぼ明らかになった。

4. 他の国字本の場合

後期版『どちらなぎりしたん』で見られた本語の開合表記の傾向は、他のキリシタン版国字本でも同じように見られるのだろうか。

現存するキリシタン版の国字本で、本文中に本語を含むもののうち、どちらな以外でまとまった形を残す『ばうちずもの授けやう』（仮題）、『サルバトル・ムンチ』、『ぎやどべかどる』、『おらしよの翻訳』、『こんてむつすむん地』の5点を探り上げて調査した。

5点の本語における開合表記の用例数は次の通りであった。

<表6>

書名 \ 開合	開音	合音
ばうちずもの授けやう	1語 6例	6語 10例
サルバトル・ムンチ	6語 15例	(用例ナシ)
ぎやどべかどる	6語 25例	11語 59例
おらしよの翻訳	6語 18例	1語 1例
こんてむつすむん地	4語 15例	1語 3例

5種類のオ段長音表記を含む本語の中から、ポルトガル語を原語とするものを抜き出し、それらが後期版どちらなと同じように、[ɔ]を開音で[o]を合音で表記しているかどうかを調べてみた。またラテン語と固有名詞に関しても、前期版・後期版どちらなのように開音で表記しているかも併せて調査した。●を付けたものはポルトガル語の[ɔ][o]を合音で表記した例、◆はポルトガル語の[o]を開音で表記した例、△はラテン語・固有名詞のオ段長音を合音で表記した例であり、●・◆・△はいずれも後期版どちらなとは逆の傾向を示す例である。前期版・後期版どちらになかった語のみローマ字綴りを併記する。()内は用例数である。

<1> 『ばうちずもの授けやう』(1592年?刊)

(ポルトガル語)

●あほうすとろ[ɔ] (1)

くらうりや[ɔ] (4) ぐらふりや (1) くらうりや (1)

●させるどうて[ɔ] (1)

すへりようれす Superiores⁽⁵⁾[o] (1)

(ラテン語)

△おうと voto (1)

△のうすてる (1)

△へるそうな (5)

<2> 『サルバトル・ムンチ』(1598年刊)

(ポルトガル語)

ぐらうりや[ɔ] (2)

◆こんへさうる[ɔ] (1) (こんへそる (16))

させるだうて[ɔ] (1)

させるだうてす[ɔ] (1)

ふるがたうりよ[ɔ] (3)

(ラテン語)

なうすてる (5)

へるさうな (2)

<3> 『ぎやどべかどる』(1599年刊)

(ポルトガル語)

●あぼうすとり[ɔ] (8) (あぼすとり (29))

ぐらうりや[ɔ] (6)

●めもうりや[ɔ] (4)

●ふるがとうりよ[ɔ] (2)

(ラテン語)

なうすてる (1)

△へるそうな (1)

(固有名詞)

△あんぼろうじよ Ambrosio (1) (あんぼろじよ (6))

△ありすとうてれす Aristoteles (4) ありすとうちりす (1)

△ばびろうにや Babilonia (2)

△きりそうす Crisos (6) (きりそす (3))

△でうてろのうみよ Deuteronomio (2)

△ゑすこうと Escoto (1)

はらわう Farao[ɔ] (2)

はらはう[ɔ] (1)

△げれごうりよ (27)

じやかうべ Iacobe (1)

せらうにも (13)

らうま (1)

<4> 『おらしよの翻訳』(1600年刊)

(ポルトガル語)

かたうりか[o] (1)

ごらうりや[o] (3)

させるだうて[o] (1)

だうねす[o] (1)

まちりもうによ[o] (1)

(ラテン語)

なうすてる (7)

べるさうな (5)

<5> 『こんてむつすむん地』(1610年刊)

(ポルトガル語)

●あぼうすとろ[o] (3)

ぐらうりや[o] (2)

◆こんへさうれす[o] (1)

させるだうて[o] (7)

させるだうてす[o] (1)

ふるがたうりよ[o] (4)

本によってゆれが大きいのが、『サルバトル・ムンヂ』『おらしよの翻訳』『こんてむつすむん地』については、後期版どちらなと同じように[o]を開音、[o]を合音で表記する傾向があるとみなしてもよいであろう。

しかし、『ばうちずもの授けやう』『ぎやどべかどる』については前期版どちらな同様に、本語表記において開合の区別が意識されていたかどうか確認することは難しい。また、この二書における開合の別を、先に挙げた亀井・チースリク・小島(1983)の先行子音の唇音・非唇音が関係していたとする説で説明しようとしても、合音で表記された o の先行子音は唇音の m, p 以外に l, r, s, t などがあるため、やはりうまく説明できない。

また語ごとにみると、Apostolo, Confessorはアクセントのある o の発音が前者は[o]、後者は[o]と推測されるため、後期版どちらなの傾向に従えば「あぼうすとろ」、「こんへさうる」という表記例があってもいいはずだが、このような例はどちらなの前期版・後

期版を含めて、キリシタン版国字本では全く見られなかった（後期版どちりなでは全て短音表記に改訂されている）。これらの語の場合は、原音の違いに合わせて開合表記を区別するという方針が固まる前に、すでに表記が定着していたのであろうか。

このように、後期版どちりなで見られたような表記の傾向が見られるかどうかは、本ごと・語ごとに程度が異なっている。

5. 通説の再考

橋本（1928）以来、キリシタン資料の記述に基づいて、開音は[o:]、合音は[o:]という発音であったというのが通説であった。後期版どちりなの本語表記をみる限り、ポルトガル語の[o]を開音で、[o]を合音で表記しているので、音の長さの問題はあるものの、発音の種類としては従来通説を裏付けるものであるように見える。

しかし、他の国字本では、ポルトガル語の[o]を開音、[o]を合音で表記する表記は、傾向としては見られても例外が多く、徹底しているとはいいがたい。このように後期版どちりな以外の国字本で本語の開合の区別が混乱していることの原因としては、当時日本語で開合の区別が音韻的・表記的に混乱していたことの影響、原語が日本語風に転訛して発音されていた可能性など、いくつか考えられる。しかし、もし実際に当時の日本語の開音が[o:]、合音が[o:]に音韻的にはっきりと対応しており、仮名表記がその開合の違いを正確に書き分けていたとすれば、先に見たような本語における開合の表記の混乱はもう少し少なくなっていたのではないだろうか。

開音を[o:]、合音を[o:]とする通説に対して、豊島（1984）や池上（1993:（上）287-292）は『日本大文典』『日本小文典』の従来解釈に疑問を呈し、開音は[ou]、合音は[oo]（または[o:]）だったのではないかと推測している。本稿の調査はこの新しい説を支持するところまではできないが、少なくとも、開音は[o:]、合音は[o:]であったとする従来通説を裏付ける証拠にはなりえない。

6. まとめ

キリシタン版国字本の本語のオ段長音は、開音で表記されたものもあれば合音で表記されたものもある。

カトリックの要理を説いた『ドチリナ・キリシタン』の国字本には前期版・後期版の二種類がある。日本語の表記に関しては、両版とも開合の別をほぼ正確に書き分けている。本語の開合については、前期版ではまだゆれが大きいものの、改訂出版された後期版では、ポルトガル語の強勢のある[o]を合音で、ポルトガル語の[o]・ラテン語・固有名詞のオ段長音を開音で表記する傾向が見られる。後期版は前期版よりも短音表記が増加

している一方、長音で表記している例に関しては、原語の[o:]と[o]の発音の違いを日本語の表記にも反映させようとの意図があったらしい。

しかし、後期版どちらなで見られたこの傾向は、他のキリシタン版国字本のどの書でも見られるというわけではなく、また語によってもゆれがあり、必ずしも徹底してはいない。このような本語の開合表記のゆれは、日本語の開音は[o:]、合音は[o:]であったとする従来からの通説に合わないため、日本語の開音・合音の発音について再考を促す実例ともなる。

<注>

(1) 本稿の調査で使用したキリシタン版の影印・索引類は以下の通りである。

Doctrina Chirstan (1592年刊) (前期版ローマ字本)

橋本進吉『文禄元年天草版吉利支丹教義の研究』東洋文庫論叢9 (1928)

『どちりいなきりしたん』(1591年?刊) (前期版国字本)

『どちりいなきりしたん (バチカン本)』勉誠社文庫 (1979)

『どちりなきりしたん』(1600年刊) (後期版ローマ字本・国字本)

小島幸枝編『どちりなきりしたん総索引』風間書房 (1971)

『ばうちずもの授けやう』(1592年?刊)

『きりしたん版集一』天理図書館善本叢書 天理大学出版部 (1976)

林重雄編『ばうちずもの授けやう・おらしよの翻訳 本文及び総索引』笠間書院 (1981)

『サルバトル・ムンヂ』(1598年刊)

松岡洸司「慶長三年耶蘇回版サルバトル・ムンヂの本文と索引」『上智大学国文学論集』6(1973)

『南欧所在吉利支丹版集録』6 雄松堂書店 (1978)

『落葉集』(1598年刊)

小島幸枝編『耶蘇会版落葉集総索引』笠間書院 (1978)

『ぎやどべかどる』(1599年刊)

『きりしたん版集一』天理図書館善本叢書 天理大学出版部 (1976)

豊島正之編『キリシタン版ぎやどべかどる 本文・索引』清文堂 (1987)

『おらしよの翻訳』(1600年刊)

『きりしたん版集一』天理図書館善本叢書 天理大学出版部 (1976)

林重雄編『ばうちずもの授けやう・おらしよの翻訳 本文及び総索引』笠間書院 (1981)

『こんてむつすむん地』(1610年刊)

『きりしたん版集一』天理図書館善本叢書 天理大学出版部 (1976)

近藤政美編『こんてむつすむん地総索引』笠間書院 (1977)

(2) このほか、同じような記述が『日本大文典』(f.56v 訳書 p.225)、ロドリゲス『日本小文典』

(f. 12 訳書 (上) p.71) やコリヤード『日本文典』(f. 4 訳書 p. 2) に見られる。

(3) Persona は António de Morais Silva, *Grande Dicionário da Língua Portuguesa*, Lisboa, 1949-59, 10ªed. などポルトガル語辞書に載っている場合もある。しかし、J. ジョルジェ編のポルトガル語で書かれたドチリナキリシタン (1602 年刊 亀井・チースリク・小島 (1983) に影印がある) にも見えるように (p.63 など)、当時も「位格」を表すの現代語と同じ *peessoa* という語を用いていた。したがって本稿では、Persona はラテン語扱いとした。

また Confessor, Gloria などラテン語とポルトガル語が同形であるものはポルトガル語風に読まれていたと思われるので、以下ではポルトガル語扱いとした。

(4) ラテン語の短い *o* がポルトガル語の [ɔ] に、長い *o* が [o] になるという語源的な原則からみて例外的な発音になる語や、現代語のポルトガルとブラジルで発音の異なる語について、音価推定の根拠を挙げておく。なお現代ポルトガル語の発音は、主として、ヨーロッパのポルトガルの発音については António de Morais Silva, *Grande Dicionário da Língua Portuguesa*, Lisboa, 1949-59, 10ªed. に、ブラジルの発音は池上岑夫・金七紀男・高橋都彦・富野幹雄共編『現代ポルトガル語辞典』(白水社、1996 初版) を参照した。

・ Confessor [ɔ] < Confessor

古典ラテン語は短い *o* で原則では [ɔ] になるところだが、現代語ではポルトガルでもブラジルでも [o] であること、Dunn (1928:20) に、

The accented termination -or has close o

とあることを根拠にした。

・ Dones [ɔ] < Donum

Dones は古語で現代ポルトガル語にはないが、前期版どちりなに「どんゑす」(17v-6) という表記が 1 例あることと、注 (3) で挙げたポルトガル語のドチリナキリシタンに *dões* の綴りが見える (亀井・チースリク・小島 (1983:32, 111)) ことから推定した。

・ Gloria [ɔ] < Gloria

古典ラテン語では長い *o* であるが、William (1962:38) に学術用語ではラテン語の「長い *o* + 短い *i*」が例外的に [ɔ] になる場合の例としてこの語が挙げられていること、現代語ではポルトガル・ブラジル共に [ɔ] の発音であることを根拠にした。

・ Matrimonio [ɔ] < Matrimonium

現代語では、ブラジルでは [o] または [ɔ]、ポルトガルでは [ɔ] である。語源的には、長い *o* から [o] に変化したことが推測される。鼻音化については、『現代ポルトガル語辞典』の「発音概説」に次のような説明がある。

[m][n][ŋ] の直前の [o] に強勢があれば、[ɔ] と発音されることが非常に多い。ただし、この時の [ɔ] の鼻音性は

onda[ˈɔda] などの [ɔ] に比べると非常に弱い。(p.1307)

池上 (1984:165-166) によると、この弱い鼻母音化は現在のヨーロッパのポルトガル語では通常見

られない現象であるが、16 世紀のポルトガル語では地域によって見られた。但し 19 世紀に入ってから、ごく弱い鼻母音であったという記述がある。したがって、[õ]であった可能性もあるが、[o]の方が可能性としては高いと推定した。

・ Purgatorio [õ] < Purgatorium

ラテン語は長い o であるが、原則に反して現代語ではポルトガルでもブラジルでも[o]になっていること、William (1962:38) に学術用語の場合長い o に短い i が続く場合[o]になる (Gloriaと同様)、とあることから推測した。この語は古典期のラテン語だけを載せる Glare, P.G.W., *Oxford Latin Dictionary*, Clarendon Press, Oxford, 1982に見られないカトリック用語で、一種の学術用語であったといえるだろう。

・ Sacerdote [õ] < Sacerdos

William (1962:37) に、多くの学術語で、古典ラテン語の長い o はポルトガル語の[o]になる場合の例としてこの語が挙げられている。

・ Sobrenatural [o] < Super - naturalis

ラテン語の短い u が、現代語ではポルトガルでもブラジルでもアクセントのない[o]になっている。William (1962:45) は古典ラテン語の短い u がポルトガル語のアクセントのない o になった例を多く挙げている。この o は前期版・後期版どちらの中でもアクセントのない o が長音で表記されている唯一の例である。

(5) ポルトガル語の Superiores はラテン語の Superior (o は短音) を語源としているので、o は原則的には[o]となるところであるが、[õ]と推定した根拠は注(4)の Confessor の場合と同様に、現代語ではポルトガルでもブラジルでも[o]であること、Dunn (1928:20) を根拠にした。

<参考文献>

池上岑夫 (1984) 『ポルトガル語とガリシア語—その成立と展開—』 大学書林

大塚光信 (1954) 「本語小考」—同著『抄物きりしたん資料私注』 清文堂出版 (1996) 所収 (初出『国語国文』23-6)

亀井孝・H.チースリク・小島幸枝 (1983) 『日本イエズス会版キリシタン要理』 岩波書店

豊島正之 (1984) 「開合に就て」『国語学』136

橋本進吉 (1928) 『文禄元年天草版吉利支丹教義の研究』 東洋文庫論叢 9

コリヤード著・大塚高信訳 (1957) 『日本文典』 風間書房

ロドリゲス著・池上岑夫訳 (1993) 『日本語小文典』 岩波文庫

ロドリゲス原著・土井忠生訳注 (1955) 『日本大文典』 三省堂

Dunn, Joseph (1928) *A Grammar of the Portuguese Language*, National Capital Press, Washington, D. C.

Williams, Edwin (1962) *From Latin to Portuguese*, University of Pennsylvania Press, Philadelphia.

(きしもと えみ・博士後期課程)